

二〇二五年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇二五年 二月四日実施

国語

四日午前四科

- 一、問題に答える時間は六十分です。
- 二、問題は、問題一 問題五 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一

次の文章は二〇〇一年に書かれたものです。これを読み、後の問に答えなさい。

さきの文章を読んだ人から、あなたは長野の新知事の「しなやかさ」という考え方をまじめに説明していたけれど、知事が作家として、といつても小説よりエッセイで活躍していた時、あなたについての「うわさ」を対談でひろめていた、本として出版されてもいる、と教えられました。

みなさん方も「うわさ」とか「告げ口」とかいう子供社会のいやなことが、大人になればなくなるだろう、と楽観していられるはずはありません。私はジャーナリズムで尊敬されている人からも、^①そういうことを続けられてきましたが、結局それを批評だとは思いうことができませんでした。

教えられた本に出ていた「うわさ」は、私がある出版社の――確かに大きくはないけれど、私の本棚にある日本語の本で専門的なものには、そこから出たものが多いところ――編集者には会いさえもしない、というのがひとつ。

事実として、小説家であるけれど研究者ではない私が、その出版社の編集者から仕事をしたいと申し込まれたことはありません。もつとも、自分で買って読む本の出版社を、永年の経験に立って選ぶように――皆さんも、そうしてください――私が自分の、年に一冊を超えることのない本を出版する際に編集者を選んできたことは、そのとおりです。^②

この話には、事実ではないけれど、ありそうな話という、「うわさ」のひとつの性格が見られます。もうひとつの「うわさ」は、私がノーベル賞をもらったことと、それまで*家内と一緒にたびたびスウェーデン大使館のパーティーに出たことを結びつける、というものです。

私の家庭には、年齢からいえば大人ですが、ひとりで家に残しておくことのできない*光がいます。ストックホルムの授賞式へも一緒に行つて、足の悪いかれを私が脇から支えていましたから、これはよく知っている大きい新聞に、障害児を売りものにしていて、というのや、この子供ぐるみの受賞といえるものだというのや、つまり攻撃的なのと、理解を示した様子のと、^②二種の「うわさ」がありました。

それは単に、息子をひとり残しては私と家内が長い旅に出られないからでしたが、私たちはかれについて来てもらつて本当に良かった、と話し合ったものです。授賞式というようなものは、大きいほど、辛いことや望ましく思わないことが

つきまとうものですが、その光が、バルト海の入りに海に向けてあずま屋のように突き出ているホテルの部屋で、ひとり私たちが待っていないければならなかった日に作った『海』という曲を聴くたび、アルフレッド・ノーベル氏の百年前の決心に感謝の思いを抱きます。

そこで授賞式の後、スウェーデン大使館で開かれた内輪のパーティーに家内と一緒に出かけお礼をいったことがあるきり、他の大使館にふたりで行ったことはないし、私ひとりでもまずそうしたパーティーには出ません。外国の大使館すじで、^③ 英語でいう悪い意味の有名な *notorious な「うわさ」が、これは事実にくくして、ひろまっているほどです。どうしてさきのような「うわさ」が語られるか？ それは事実とは無関係に、悪意と軽薄さが「うわさ」の運動のエネルギーとなっているからです。もともと^④ 「うわさ」にそういう性格があるのです。

そこで私は、皆さん方に、^⑤ 「うわさ」への抵抗力を強くしてもらいたい、と思います。そのためには、ふたつの側面から努力すればいいのです。

まず、ある「うわさ」を聞く、とします。それを信じる前に、周りの人のいつていることなら、それより他の人たちの意見も聞いて、本当かどうかを確かめてみてください。新聞の報道だと、ひとつの「うわさ」が気にかかれば、それに声をあわせるもの、それと反対の情報がのっているもの、中立のものと、数種の新聞を調べてみることです。それには図書館が便利です。

「うわさ」を聞いて、それがあやしげな、いかがわしいものであるほど、かえって勇みたつて、それをふくらませずらして発信して、面白がつてもらおうとする人がいます。私は、そういう性格の人には、有名な人物でも、冷淡な気持ちしか持ちません。

もうひとつの側面からの努力は、こうです。それが根拠のない「うわさ」である時、しかも自分がそのなかにいる社会で――遊びの場や教室で、また家庭に帰ってでも――「うわさ」がひろがってゆこうとするのへ抵抗することです。「うわさ」は誰もが面白がるし、感染する力が強いようで、じつは、本気でその「うわさ」に抵抗する人がいれば、とくにはじめのうちならすぐ打ち倒せます。

それでいて、その弱い「うわさ」が、ある程度以上に大きくなると、危険な、別の種類の力を持つのです。あなた方が、

世界の歴史を勉強して、なによりためになることに、そのような「うわさ」がどれだけ大きく不正な力を発揮したか、その実例を知ることがある、といたいくらいです。それらの、人類を不幸にしたひどい暴力としての「うわさ」も、最初に勇気のある正直な人たちが、それは本当じゃない、といていたとしたら、小さく弱いうちにつぶすことができたはずなのです。

フランスの、オルレアンという古い市のことを聞かれたことがあるでしょう？ 十四世紀から続いた百年戦争の終わりに、ジャンヌ・ダルクが英国から解放した市です。一九六九年、この市で不思議な「うわさ」がひろまったのです。市にある六軒^{けん}の婦人服の店で、若い娘さん^{むすめ}が試着室に入ると、葉をのまされて連れさられ、外国の、女性たちが苦しい仕事をさせられる店に売られる！ 実際には、警察に行方不明の届けは一件も出されていなかったのですが、それは市のみならず、フランス全土にひろまる「うわさ」となりました。

この「根も葉もないうわさ」が、どのように作られ、ひろまったか、社会的に、また歴史的に、どんな根拠を持つ「うわさ」の出方だったか？ それを責任感のある学者たちが調査しました。エドガール・モランという社会学者が、代表して報告を書いています。

モランがあきらかにしているのは、これらの婦人服店の経営者たちが、みんなユダヤ人だった、ということです。店主たちはついに生命の危険さを感じることに、警察に保護をもとめました。モランは、ヨーロッパ全域の人びとが、ナチス・ドイツによるユダヤ人の大量虐殺^{ぎゃく}について知った後のこの時期に、反省されたはずの社会的な差別、偏見^{へん}が残っていること、^⑥歴史的にも遠くさかのぼる根があつたことを示し、「うわさ」の作られ方、ひろまり方の典型的な恐ろしさを分析^{せき}しています。

モランの本で、私がとくに皆さん方に注意していただきたいことは、オルレアンの女子生徒の通う学校の、一部の女性教師たちが「うわさ」に影響^{えいきやう}され、「うわさ」がひろまることを助けた、という事実です。ユダヤ人の経営する婦人服店には行かないように、と生徒たちに話した女性教師のいたことが報告されています。

私が、「うわさ」への抵抗力を強くしてもらいたいというのは、^⑥女子生徒たちの間で、この「うわさ」を確かめ

る動きを起こし、動揺ようされている女の先生ともよく話し合つて、実際にはこういう出来事はないのだ、と家庭に帰つてつたえることもできたはずだからです。そうして市のふんいきを自分たちで作りかえてゆく、という方向に向けて。そうした具体的な働きにこそ、若い人たちの「しなやかさ」が発揮はつひされることを望みます。

ユダヤ人に対する、社会的、また歴史的な偏見は、日本にはないのじゃないか、これは外国のお話じゃないか、といわれる人もあるのではないのでしょうか？ 一方、そうじゃない、という人たちがいます。私が外国で教えた学生たちが東京に来てまず驚おどろいたというのは、大きい本屋の店先の、よく売れる本を表紙を上になべてある——平積みひらづみ、といいます——場所に、日本人の書いたユダヤ人に対する偏見にみちた本が置かれていて、ということなのです。

それは、単に日本人がよく知らないことに好奇心きんきをおおられやすい、ということでしょうか？ 私はそうじゃないと思います。人間は、自分たちの世界が大きな邪悪じあくな力におびやかされている、という情報に敏感びんです。それは当然のことです。現在は、文明の作つたさまざまなものに私たちの社会は守られています——その逆に、核兵器かくとかオゾン層の破壊かいとか、文明の作つたもののおかげで、危険にさらされてもいますが——。はるかな昔の人たちは、私たちよりもっと敏感でいなければなりませんでした。いまでは人間が戦いに勝つた疫病えきにも、永くどんなに苦しんだか。ペストとの戦いに日本人の医学者がついでこの間、大きい働きをしたことをご存知でしょうか？ コレラについていうと、二百年近く前のこの国で、オランダからつたわつた医学を勉強しはじめたばかりの若者たちが、当時の書き方では大坂で強力な働きをしました。このように、人間に対して邪悪な働きをするものの実体がわかれば、それと戦うことができます。戦う人間はいます。

◎、実体がわからない時、人間は、漠然ぼくとした空想をしがちです。そして、自分たちの空想のなかで、そうした邪悪な働きをするものの、二セの正体をこしらえあげてしまうのです。

ヨーロッパの歴史をつうじて、ユダヤ人たちは、その被害ひをこうむってきた人たちです。古いロシアや東ヨーロッパで、ユダヤ人たちへの大きい迫害はくがありました。それがひとつの国の政策となつて、何百万人ものユダヤ人たちがガス室で殺されたのが、まだ六十年たらずの昔でしかないナチス・ドイツの場合です。

私が皆さんにすすめたいのは、ユダヤ人がどのような苦しく辛い経験をして、多くはそのまま殺されたかを、少年や少女の目で見た記録を読むことです。私の父親のいった、⑦ 子供には子供の戦い方がある、ということのまさに有力な例として、ユダヤ人迫害の現場で起こったことを見つめていた子供たちの記録があります。

『アンネの日記』はそのなかでも、なにより広く知られたものです。この本を読んだ人たちは、愛らしく利発なユダヤ人の少女、アンネ・フランクの運命だけでなく、ユダヤ人たちが第二次世界大戦時のドイツおよびその周りの、当時ナチス・ドイツの勢力下にあった国で、数多く殺されたことを忘れないでしょう。

ところが、日本で『アンネの日記』を出した大きい出版社が、数年前、今度は、ユダヤ人を大量に殺したガス室はなかった、という記事を、そこから出している雑誌にのせたのです。

出版社は、国内からも海外からも——それがとくに力の強いものでした——批判を受けて取り消しました。ユダヤ人の受けた大きい悲惨^{さん}をなかつたことにする——それは、恐ろしく邪悪なのは、ユダヤ人の方だという、昔ながらの「うわさ」に参加することです——態度が、日本にもあることを私は外国の若い友人たちに認めねばならなかつたのです。

私が不思議に思ったことは、あの出版社に、『アンネの日記』を読んで心をうたれたことのある少年や少女が成長し、編集者として働いていなかっただろうか？ ということでした。大人になれば忘れるというのなら、子供の読書はムダです。皆さん方は、⑧ いま子供の自分が読んでいる本はムダだ、という社会にしてしまう大人たちと戦わねばなりません。自分でしっかり確かめていない「うわさ」にはしたがわない、ということも、その戦い方のひとつです。

(大江 健三郎「『うわさ』への抵抗力」『「自分の木」の下で』所収 朝日新聞社)

〈注〉 *家内……家族。ここでは妻のこと。

*光……大江光。日本の作曲家。筆者の長男で、脳に障害を持って生まれた。

*notorious……悪名高い、評判の悪いという意味の英語。

問一 文中の①に入る最も適当な語を次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア たとえば イ しかし ウ つまり エ また オ さて

問二 ——線部①「そういうこと」とありますが、その内容として適当な部分を本文中より十五字以内で抜き出して答えなさい。

問三——線部②「二種の『うわさ』」とありますが、具体的にどのようなうわさなのか、解答欄の「といううわさ」につながるようにそれぞれ十五字以内で答えなさい。

問四——線部③「英語でいう悪い意味の有名なnotoriousな『うわさ』」とありますが、どのような悪いうわさが広まったのですか。説明しなさい。

問五——線部④「『うわさ』にはそういう性格があるのです」とありますが、「そういう性格」にはどのような特徴がありますか。説明しなさい。

問六——線部⑤「『うわさ』への抵抗力を強くしてもらいたい」とありますが、そのために筆者は具体的にどうしたらいいと述べていますか。二つ答えなさい。

問七——線部⑥「歴史的にも遠くさかのぼる根」とありますが、これはどのようなことを指していますか、答えなさい。

問八——線部⑦「子供には子供の戦い方がある」とありますが、それはどのようなものですか。最も適当なものを次のア～オから選び記号で答えなさい。

ア 子供の視点から見た当時の様子を自分でよく想像してみること。

イ 少年少女が現場で起こったまを見つめて書き残すこと。

ウ 大きな出版社が発表している本や雑誌を選んで情報を集めること。

エ 昔の人から言い伝えられているものの見方に従って考えること。

オ 社会一般に広く伝えられている内容をよく理解して考えること。

問九——線部⑧「いま子供の自分が読んでいる本はムダだ、という社会」とありますが、このような社会ではどのようなことが起きますか。最も適当なものを次のア～オから選び記号で答えなさい。

ア 人から聞いた「うわさ」があやしげであると思いつながら、自分でも喜んで発信すること。

イ 大人になると、実際に起きている出来事の情報の方だけが大切だと考え、本を読まなくなること。

ウ 真実が書かれた本を読んだにもかかわらず、「根も葉もないうわさ」に流されてしまうこと。

エ 邪悪なものと出会った時、自分たちの空想の中で二セの実体を作り出してしまうこと。

オ 現代の日本には社会的、または歴史的な偏見がないと思いつ込んでしまうこと。

問十 本文全体を通して筆者は「うわさ」に抵抗し戦わなければならないと述べていますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 子供たちは『アンネの日記』を読んで、ナチス・ドイツがユダヤ人を数多く殺した歴史的事実を知ったはずなのに、大人になるとそのような事実はなかったという「うわさ」を信じてしまうことがあるから。

イ 事実はないが、そのような「うわさ」は、受け取る人の好奇心を巧みに刺激すること、誰もが容易に信じてしまい、「うわさ」される本人の心を大きく傷つけてしまうことになるから。

ウ 事実とは無関係に、人を攻撃するため悪意をもってつくられた「うわさ」は、その「うわさ」を否定する根拠を明らかにすることが困難で、広がっていくことを止めることが容易ではないから。

エ フランス全土に広がったオルレアンでの「うわさ」は、ユダヤ人に対する歴史的な偏見から生まれたもので、「うわさ」の恐ろしさによって心ならずも広まってしまったものだから。

オ はじめは小さく弱い「うわさ」でも、ある程度以上に大きくなると、不正な力を発揮するようになり、人類を不幸にするひどい暴力となってしまう危険性があるから。

問題二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

締め切り日の一週間後。

校長先生の予告どおり、正面玄関の靴箱の向かいの壁にずらりと俳句の垂れ幕がさがったのは、壮観だった。全部で、百五枚。まるで、①俳句の*ナイアガラだ。

垂れ幕に使われているのは、書き初めに使う用紙だ。お経を全部書けそうな長い紙に、余白もたつぷり、堂々と十七音の言葉を並べるのは、a贅沢。たぶん書道部に依頼したのだろう、見事な筆文字で、句のよさが何倍も引き立つ。

「クリスマス彼女いなくて苦シミマス」とか「桜山ああ桜山桜山」とか「朝ねむい夕方ねむい夜ねむい」なんていう、ふざけてボックスに入れたにちがいない句まで、書道部によって律儀に美麗な字になっているのがおかしかった。

もちろん、署名は入っていないので、だれの句なのかは、わからない。

「墨の匂いがするのって、新鮮」

「なんか、学校っていうか、道場に入るみたいだね」

「そういえばサクラのシール、こないだ配られたな」

俳句の滝を前にして、わいわい言い合っている生徒たちの声を聞くと、新春俳句大会が予想以上に盛り上がりそうで、ユミもわくわくしてくる。

いちおう、自分の俳句が入っているかどうか確かめてみた。

木枯しに進路希望書飛ばしたし

あった、あった。立派な筆文字になっている。あらためて見ると、私の句、悪くないじゃん。なんだか、鼻がむずむずする。

二年生になってから、進路希望調査書が何度も配られるようになって、そのたびに先生が「これは重要な書類だから親御

さんとよく話し合うように」と言うのに、ちよつとうんざりしていたのだ。一瞬のいまに全力を傾けていたのに、まだかたまっていない先のことを言葉になんかできない、木枯しに飛ばしてしまえ！ という、本音の部分を詠んだものだ。「木枯し」「飛ばしたし」で、うまく脚韻を踏めたのが、ひそかな自慢だった。

「俳句のナイアガラ」の、ちようどまん中あたりに架かっているのも、運がよかった。みんながよく目にする位置だ。これは幸先がいいなあと、ユミはうきうきした気分で、朝練に向かう。

それから、暇を見つけてはこっそりと、見に行っていたのだが……

こんなことであるの？ とユミは戸惑っていた。

サクラのシールが、自分の句のまわりに、どんどん貼られているのだ！

たしかに手ごたえはあった句だったけれど、いつものヒマワリ句会では、人数が少ないこともあって、最高でも三点しか入らない。

ところが、さすがは「俳句大会」というべきか、自分の句への賛同者が、こんなにもいてくれるというのが、ユミにとつては衝撃だった。

みんな、気をつかって、文字にはかからないように貼ってくれているが、もう貼るところがなくて、用紙の端にもはみだして貼られている。まるで、羽根付きギョーザみたいに。

「べつに点数で句の良し悪しが決まるわけじゃないけど」というソラの意見は、正しいと思う。

でも、自分の句が、たくさんさんの点を集めたのは、純粹にうれしい。

「木枯し」の句だけに、まるで枯木に満開の花が咲いたように見えるのも、うれしさに拍車を掛けていた。

たぶん、進路希望調査書については、みんな、程度の差はあるだろうけれど、悩まされているのだ。それで、^② 共感した

人が多かったんだろうとユミは分析した。

つい、分析的に見てしまったのも、うれしいという感情の行き場がなくて、自分で自分を落ち着かせるしかなかったからだ。

クラスの友だち。弓道部の仲間たちにも、打ち明けたい。これ、私の句なんだよって。

でも、それはできない。選句の最終日まで、がまんがまん。まだ、私が一位って、決まったわけじゃないし。

われながら、ちよつと子どもっぽいと思ひながらも、ユミはついつい、何度も正面玄関に見に行つてしまふ。

…… 中略 ……

「ユミさん、ありがとう、来てくれて。忙しかつたでしょ？ 午後からは練習？」

「うん。三月に、桃宮神社で祭りがあつて、演武に呼ばれているから」

本当はすぐにでも、学校には来られそう？ と聞きたかつたけれど、ユミはこらえた。

まずは、ソラの話をして、しっかり聞こう。

「ごめんね。ヒマワリ句会、ずっと休んでて。手紙も……」

「いいよ、気にしないで。三人とも、俳句大会には参加できたわけだし」

「そのことなんだけど……」

正面を向いていたソラの顔が、ころもち、地面のほうに傾ぐ。

「こないだ、見に行つたんだ、学校に。玄関先に、貼りだされてたでしょ。やつぱり、自分の句の点数が気になつちやつてさ。それで……一点、入つてたんだ」

③ ユミは軽く驚いた。点数で、句の良し悪しが決まるわけじゃないと言つていたのは、ソラ自身だつた。でも、やつぱり、点数が低いのを気にするのだろうか？

ソラは、そんなユミの感情を察したのか、いそいで打ち消す。

「ちがうんだ。点数が入らなかつたことが、シヨックなんじゃない。ゼロ点だつてよかつた。自分で納得のいく句が書けたからさ」

「どういうこと？」

「僕、あの……一年のとき、臣野シゲルに始められてさ。僕のこの、顔のホクロのことだからかつてきて、クラスで仲間外れにされてた。それで、なんとか自分の中で、整理できないかと思つて。あのときとは、ちがう。僕には俳句がある。だから、臣野とのことの記憶を、俳句にしてみたんだ。みんなに見てもらいたくて」

ユミは、投句された全部の作品に目を通していた。

でも、いじめを匂わせるような内容のものは、なかつたはずだ。

「俳句^{はいく}つてき、短いから、じゅうぶんに言いたいことが言えないでしょ？　そこが物足りないって思う人もいるかもしれないけど、逆に、僕^{ぼく}にはありがたいっていうか……」

「ああ、それ、わかる気がする。作者には隠^{かく}した意味があっても、それを受け取るかどうかは、読者まかせなのが気楽^{きらく}っていうか」

ユミの共感がうれしかったのか、ソラの口もとが、少しだけやわらぐ。

「だから、逆に、臣野^{おみの}にいじめられたってことを、はっきりわかるように書いて、みんなに告発^{てくはつ}するみたいな感じになるのは、嫌^{いや}だったんだ。でも、まるでなかったことには、したくなかった。臣野^{おみの}にされたこととか、僕^{ぼく}の思いとかを、かけらでもいいから、みんなの目に触^ふれるところに差し出したかったんだ。中途半端^{ちゅうはんぱ}な態度^{たいど}かもしれないけど……」

「そんなことないよ」

ユミは、力強くうなずいてみせた。それに勇気づけられたのか、ソラはゆつくりとまた、話し始める。

「④だから、点は入らなくてもよかったんだ。わかりやすい句^くってわけじゃないしさ。なにしろ、百人以上投句^{とうく}しているわけだし。でも、こないだ見に行ったら、サクラのシールが一枚、貼^はりつけてあった。誰^{だれ}かわからないけど、うれしかったな」

「ねえ、ソラくんの出した句^く、よかつたら教えてくれない？」

ソラは一瞬^{いつしゆん}、戸惑^{とまど}った様子だったが、照れくさそうに持っていた携帯^{けいたい}を差し出した。

ハセオとのメッセージのやり取りが、画面に表示^{ひょうじ}されている。

「その、真ん中に書いてあるやつ」

ソラの携帯^{けいたい}をのぞきこむと、そこに書かれていたのは――

手袋^{てぶくろ}を重ねても蝶^{ちよう}にはならない

ユミは、思わず「あつ」と声に出した。『俳句^{はいく}のナイアガラ』をめぐって全部の作品を見たときに、気になっていた句の一つだった。家に帰ってきて、手袋^{てぶくろ}を重ねて置く。外の冷気を吸^すってべたりと重そうに置かれた手袋^{てぶくろ}の、蝶^{ちよう}のつばさに似て

いるようで程遠い、不格好さ。自分の行きどころのない気持ち、形になったようだ。謎めいていて、作者の意図がわかりにくい句ではあり、それが票が集まらなかった理由なのだろうが……

「私は好きだな」

五七五のリズムをはみだした破調や、「手袋」と「蝶」の季重なりが気になって、最終的には別の句を選んだのだが、クラシールを貼る候補にあげた句ではあった。ソラの句だとわかると、⑥十七音にこめた思いが伝わって、切くなる。はつきりといじめの句だとわかるわけではないが、たしかにある悲しみが、ここには詠みこまれている。

「ありがとう。実はさ、冬休みのあいだ、ハセオとずっとメッセージのやりとりをして、百句近くは作ったんだ。それでようやくできた句だったから。自分の中では、もうそこでやりきったっていうか、区切りがついたっていう感じ」

「そう。……じゃあ、もう学校には来られそう？」

ユミが期待を込めてそう言う、

「うん、今日言おうとしていたのは、そのことなんだけど……僕、ヒマワリ句会を抜けようと思ってるんだ」

「えっ」

ユミは絶句する。「区切りがついた」って、そういうこと？

「しばらくは、保健室に行くのもやめて、自宅で勉強に専念してみる。来年度は、受験生だしさ。たぶん、俳句大会がきつかけで、ヒマワリ句会にも、新入会員が入ってくると思うんだ。いままではさ、必要最低限の人数だったから、僕もいる意味があつたけど」

「それって、俳句をやめちゃうってこと？」

ユミの問いに、静かに首を振るソラ。

「俳句はこれからも続けていくつもり。自分の一生の表現にするって、もう決めてるから。でも、ヒマワリ句会は卒業する。もしもまた、ああいうことが起きたら、僕は冷静でいられないと思う。でも、ハセオや、ユミさんとは、これからも友達でいたい。今日は、そのことを言いたかったんだ」

そんな。

ユミは反射的に、「なに言ってるの！」と叫びたくなった。ヒマワリ句会から自分が抜けてもいいなんて、本気で思っ

いるのだろうか。ソラの存在が、どれほどみんなにとって大切な、気づいていないなら鈍感すぎる！ またああいうことがあるかもしれないなんて、不確定なことでみんなの気持ちを裏切るなんて……と、言ってやりたいことが、次々と心に湧きあがってくる。

⑤ でも、あることに気づいて、口をつぐんだ。

ソラの中に、残っている不安。また、保健室で臣野とぼったり会うかもしれないという不安。

ユミには、それをきっぱりと否定できない。臣野が、いま、保健室にたびたび通っていることを、知っている。

臣野シゲル。

あのとき——ヒマワリ句会に入り込んできたとき、突き指だなんて言ってたけど、あれはあきらかな嘘だ。ソラの歳時記やら短冊を、平気な顔でいじっていた。

彼はひよつとしたら、いまは逆に、仲間はずれにされているんじゃないだろうか。保健室に通うようになったのは、それが理由だとユミは見ている。

そうなれば、今後はますます、顔を合わせる確率が高くなってしまう。

もしも、臣野シゲルが追い詰められているというユミの推測が正しければ、二人が出会ってしまうことで、いつそうまずい事態にもなりかねない。むしろくしゃしている臣野シゲルが、また、ソラというかつこうのいじめ相手を見つけて、自分のストレスのはけぐちにするようになったら？

ブレーキのきかなくなつた電車みたいに、悪いほうにどんどん想像がいつて、最後には脱線して、大破してしまいそうだ。言わないでおこう。ユミの出した結論は、それだった。ソラの決意を、ますます固くしてしまいそうだったから。

「ユミさん、演武、がんばってね」

練習に向かうユミを見送って手を振るソラ。その顔がはればれとしてるのが、© 悲しかった。

…… 中略 ……

ユミはふいに、声をひそめた。

「ねえ、あれって……」

となりのハセオの腕をつつく。

「俳句のナイアガラ」の前に、たたずむ人影があつた。

遠くからでも、目立つ長身。

ひとつの短冊の前で、じつと動かない。何か考え込んでいるのか、ハセオとユミが近づいているのにも、気づかない様子だ。

「どうしたの、こんなところで」

ユミに声をかけられて、ふりむいたその長身の影。

臣野シゲルは、軽い驚きを顔に出した。

「ああ……榎本じゃん。一位、おめでとう」

臣野シゲルは、にこつと笑つて見せる。ただ、ユミにはそれが、粘土で作つたようないんちきな笑顔に見える。

「そっか、君ら、俳句部だったよな」

臣野は、ハセオの首に下がったカメラにちらつと目をやつて、

「記念撮影するなら、おれ、撮つてあげようか？」

愛想よくそう言つて、手を伸ばす臣野。

ハセオはそれに応えないどころか、あらぬ方に目を向けていた。見ているのは、ある一枚の垂れ幕のほう。サクラマークが、一つだけついている。

手袋を重ねても蝶にはならない

ソラの句が書いてある垂れ幕だ。⑥ユミは、はつと息を呑んだ。

「……この句に一票入れたのって、ひよつとして、あなた？」

「まあね」と臣野。

「結局、おれだけしか入れてないんだもんな。最終的に何票入ったのか、ちよつと気になって見にきたんだけど」

「その句って——」

ユミの言葉を遮るように、ハセオがいつもの調子で口を挟む。

「臣野、この句、どう思った？」

臣野シゲルは、げげんそうにハセオの顔を見て、

「君、2ーBの松田ハセオだね？ 有名な……」

「そんなん、どうだっていいじゃん。おれ、俳人だからさ、この句についての、君の評価が聞きたいの」

「……おまえって、うわさどおりの、変わり者だな」

吐き捨てるように言う。⑦ その臣野シゲルの瞳は、数秒前とはうってかわって暗く翳っていた。

このままでは、臣野は、立ち去ってしまう。ユミはあわてて、

「私も知りたいな。臣野ってさ、俳句に関心あるように見えなかったから」

ユミのほうに向き直った臣野シゲルの目からは、さきほどの暗い翳りは消えていた。

クラスメートの前では、まだいい恰好を崩したくないのかもしれない。

でも、ユミはすでに目の当たりにしていた。ハセオに向けた、冷たい表情を。

「感想なんか、別にないよ。なんとなくってだけ」

「さっきと言ってること、矛盾してんじゃない。評価が気になって、わざわざ見にくるほどなんですよ？」

また、臣野シゲルの目がぎらりと光る。となりで聞いていて、ユミはハラハラする。この場を去りたいという純粹な不快感と、体面を取り繕わなくてはという義務感のあいだで、臣野シゲルは揺れているのだろう。

…… 中略 ……

「感想っていったってな……おれは俳句なんてぜんぜんわかんねえし」

と臣野は困ったように頭をかく。

こういう、けだるい感じの臣野が、素の彼なのかもしれないと、ユミは思った。兄貴分で、クラスのまとめ役として見えていたのは、彼のあくまで表の一面なのだ。

「これって、手袋の手を誰かに差し出していて、でもその相手とは心は通じそうもないってことだろ？ それをさ、『蝶にはならない』っていったのは、なんかいいなと思ったんだよ。それだけ。……もういいだろ？」

立ち去ろうとした臣野シゲルの腕を、ハセオが、がしつとつかんだ。

「⑧ 臣野^{おみの}つてき、俳句^{はいく}を見る目、あると思うよ。むいてるんじやね？」

ハセオは目を輝^{かがや}かせている。ユミには、その輝^{かがや}きの意味がわかった。

そうだ、この句^くの解釈^{かいしやく}、私は臣野^{おみの}とは、ぜんぜん違^{ちが}っていた――。

「『重ねても』つていうところ、二通りにとれるんだよな！ 家に帰って、外した自分の手袋^{てぶくろ}を重ねているんだって、おれは解釈^{かいしやく}してたけど、臣野^{おみの}はいま、誰^{だれ}かと手をつなごうとしている、でもその相手とはわかりあえないって解釈^{かいしやく}した。そういう取り方もあるんだってこと、おれは気づかなかったよ。そのほうが作者の意図には近いかもしれない。おまえのほう……この句^くの作者の気持ち、わかつてるよ」

「なに言^いつてんだ？ ……いいから、離^{はな}せよ」

荒^{あら}つぽく、ハセオの手をふりほどく。二人に背^せを向け、キュツキュツ……と上履^{うわば}きの音を鋭^{すど}く響^{ひび}かせ、その場から立ち去ろうとする。

ハセオは、手を口の横にそえて、臣野^{おみの}の背^せ中^{なか}に向かって言葉^{ことば}をぶつけた。

「おまえさつき、おれら^はを俳句^{はいく}部^ぶつて言^いつてたけど！」

ふりむかない背^せ中^{なか}に、ハセオは言い続ける。

「ヒマワリ句会^{くかい}つていつて、まだ部^ぶになつてないんだ、これからなんだ」

はたから見たら、ハセオがひとりで叫^{さけ}んでいるように見えたかもしれない。でもユミは、ずんずん遠ざかつていく臣野^{おみの}シゲルの背^せ中^{なか}は、その声^{こゑ}を聞^きいている気がした。

「ヒマワリ句会^{くかい}、のぞきにこいよ！」

(高柳^{たかやなぎ} 克弘^{かつひろ} 『そらのことばが降^ふってくる 保健室^{ほけんしつ}の俳句会^{はいくかい}』 ポプラ社)

〈注〉 ＊ナイアガラ……アメリカとカナダの国境にある、幅^{はば}が一キロメートルにもおよぶ滝^{たき}。

問一 文中の a c に入る最も適当な語を次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア かえって イ ちょうど ウ なおさら エ なんと オ もちろん

問二 — 線部①「俳句のナイアガラ」とありますが、何が、どのような状態だというのですか。答えなさい。

問三 — 線部②「共感した人が多かったんだらうとユミは分析した」とありますが、「ユミ」は自分の俳句のどのような気持ちにみんなが「共感した」と考えていますか。説明しなさい。

問四 — 線部③「ユミは軽く驚いた」とありますが、それはなぜですか。答えなさい。

問五 — 線部④「だから、点は入らなくてもよかったんだ」とありますが、なぜ「ソラ」はそうに思っていたのですか。最も適当な語を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 自分の思いをかけらでもいいからみんなの目に触れるところに差し出したいという態度で作った句で、周りの人に共感してもらえるかどうかは気にならなかったから。

イ 自分の俳句がたくさんさんの点を集めて目立ってしまうことで臣野の目に留まり、臣野が自分の俳句だと気づいてしまうかもしれないことが怖かったから。

ウ 他の人に見せるために作ったものではなく、自分の思いをなんとか形にしたい一心で作った俳句なので、思いのたけを表現できたことだけで十分満足していたから。

エ 点数で句の良し悪しが決まるわけではないから、自分の句に点が入らなかったとしても句の出来が悪いということにはならないと自信をもっているから。

オ 俳句は短くて言いたいことを全部は言えず、どうしても伝えきれないことが残ってしまうものだから、周りの人に内容を理解してもらい共感してもらえないはずはないと思っているから。

問六 — 線部⑤「でも、あることに気づいて、口をつぐんだ」とありますが、「ユミ」はどうして「口をつぐんだ」のですか。説明しなさい。

問七 — 線部⑥「ユミは、はっと息を呑んだ」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問八——線部⑦「その臣野シゲルの瞳は、数秒前とはうってかわって暗く翳っていた」とありますが、ここから「臣野」のどのような思いが読み取れますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 聞かれても答え方に困るような質問をされた戸惑い。

イ 自分の発言の矛盾をハセオに指摘てきされるのではないかという心配。

ウ ハセオが自分に向けている敵意をはつきり感じ取った警戒かい感。

エ ハセオに変わり者だと指摘されたことで感じる自分のふるまいへの不安。

オ 面識のない相手が触れてほしくないことを聞いてくることへの不快感。

問九——線部⑧「臣野」が思ったのはなぜですか。説明しなさい。

問題三

次の①～⑩の――線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① 東北地方はかつてヨウサン業が盛んだった。
- ② この映画のアツカンは、母と子が再会する場面だ。
- ③ 行動する前にメンミツな計画を立てる。
- ④ 毎日をホガラかな気持ちで過ごす。
- ⑤ フルカブの社員の知恵を借りる。
- ⑥ 延べ三十人の人が作業に参加する。
- ⑦ これは揮発性の液体だ。
- ⑧ 昼が最も長い日が夏至だ。
- ⑨ 正論だけを言う人は敬遠されがちだ。
- ⑩ 村祭りには老若男女がこぞって参加する。

問題四

次の①～⑩の――線部の意味にあたるものを後の語群のＡ～ソから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 弟の言い分にはいささか疑問が残る。
- ② いたずらに国民の不安をあおってはいけない。
- ③ 想定外の意見だが、あながちまちがいとは言えない。
- ④ 彼の悪名はあまねく知れ渡るわたことになる。
- ⑤ 生活費をかせぐためにあくせく働く。
- ⑥ 早寝早起きを心がけてから、すこぶる健康だ。
- ⑦ その噂が本当かどうかにかにわかうわさに断定はできない。
- ⑧ 好天が続いているが、とりわけ今日はすがすがしい。
- ⑨ 彼女はおもむろにポケットから財布を取り出した。かのじょ
- ⑩ その映画の評判はおしなべて好評だ。

【語群】

ア	少しも	イ	必ずしも	ウ	そっけなく	エ	ゆつくり静かに	オ	むだに
カ	総じて	キ	とても	ク	少し	ケ	特別に	コ	とりとめもなく
サ	疑わしく	シ	せわしなく	ス	思いがけず	セ	広くすみずみまで	ソ	急に

問題五

後の【語群】の中に、上下を入れかえても熟語になる組み合わせが五つあります。（例）にならって熟語を作り、作った熟語がたがいに近い意味を持つものには○、意味が異なるものには×を答えなさい。
なお、解答欄の①には熟語を作るのに選んだ漢字二字（順不同）を、②には○か×を記入しなさい。

（例）【語群】

【解答欄】

上 中 下 弟 姉 子 途

選んだ漢字

意味（○か×）

中・途 ↓ 途中・中途

①

中

途

②

○

弟・子 ↓ 弟子・子弟

①

弟

子

②

×

【語群】

産 誕 中 裏 生 命 行 運 別 実 現 列 口 心 君 拳